

広島県における今後の高等学校教育の 在り方を検討する協議会会議録

平成24年4月26日（木）

広島県教育委員会

広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会出席者名簿

平成24年4月26日（木）

午前10時から正午まで

1 出席委員（50音順）

青	木	暢	之
赤	岡	功	
伊	藤	敬	之
加	藤	千	政
川	野	祐	二
吉	川	信	政
古	賀	一	博
牛	来	千	鶴
坂	越	正	樹
佐	々木	寛	
砂	原	文	男
武	田	哲	司
寺	西	玉	実
富	永	健	三
中	川	和	義
長	田	克	司
西	井	裕	昭
二	見	吉	康
前		眞	一郎
三	好	久	美子
毛	利	葉	

2 欠席委員（50音順）

小	村	和	年
山	口	寛	昭

事務局：皆様、おはようございます。ただいまから広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会第1回を開催します。

それでは、お手もとの会議次第に沿って会議を進めてまいります。

初めに、広島県教育委員会教育長の下崎が御挨拶を申し上げます。

下崎教育長：皆さん、おはようございます。広島県の教育長の下崎でございます。

協議会の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、委員の皆様方に公私とも大変お忙しい中、第1回協議会に御出席をいただき誠にありがとうございます。

また、このたびは、委員の皆様方におかれましては、本協議会の設置に当たりまして、早く委員の就任を御承認いただきまして誠にありがとうございます。改めてお礼を申し上げます。

この協議会を設置いたしまして、本県における今後の高等学校教育の在り方を検討することが必要であると考えておりますのは、大きく次の2つの理由がございます。

まず1点目は、近年、知識基盤社会の到来や社会・経済のグローバル化の進展など、社会全体が大きく変化をしてきており、今後、社会の持続的な発展に寄与することができる人材の育成ということが求められているところでございます。そのために、高等学校においては、国立・公立・私立を問わず、生徒一人一人が能力や才能を着実に伸ばすことができる新しい時代にふさわしい教育を目指す必要があるというふうに考えているところでございます。

2点目は、昨今の教育行政を取り巻く環境の変化といたしまして、国においては教育基本法の改正を初めとする法改正が行われるなど、改革が行われているところでございます。また、国において、中教審、中央教育審議会においても、高等学校の教育の在り方について審議がされているところでございます。

また、本県では、平成22年10月に、ひろしま未来チャレンジビジョンの策定をいたしまして、人づくりの取組の方向性を示したことがございます。

こうしたことを背景といたしまして、現行の県立高等学校再編整備基本計画が平成25年度までを計画期間といたしていることを踏まえまして、広島県における今後の高等学校教育の在り方の検討と、そして、広島県における高等学校の在り方、さらにはそれを受けまして、本県における県立高等学校の在り方ということを検討していく必要があるというふうに考えているところでございます。

本協議会で検討していただくテーマは、後ほど諮問をさせていただきたいというふうに考えておりますけれども、大変重要な課題でございます。皆様方から率直かつ自由闊達な御意見、御協議をいただきまして、総合的、長期的な観点から御提言を賜ればというふうに思っております。

何とぞよろしく願いをいたします。

本日、よろしく願いをいたします。

事務局：続きまして、本日御多忙の中、御出席いただきました委員の皆様を、永井学校経営課長から紹介させていただきます。

永井学校経営課長：失礼いたします。

本日、御多忙の中、御出席いただきました委員の皆様を、御着席をいただいております50音の順に御紹介をさせていただきます。

株式会社中国放送代表取締役社長青木委員でございます。

青木委員：青木でございます。よろしく願いいたします。

永井学校経営課長：続きまして、県立広島大学学長赤岡委員でございます。

赤岡委員：赤岡です。どうぞよろしく願いいたします。

永井学校経営課長：続きまして、マツダ株式会社人事室主幹伊藤委員でございます。

伊藤委員：伊藤でございます。どうぞよろしく願いします。

永井学校経営課長：続きまして、広島県PTA連合会会長加藤委員でございます。

加藤委員：加藤でございます。どうぞよろしく願いいたします。

永井学校経営課長：続きまして、エリザベト音楽大学学長川野委員でございます。

川野委員：川野です。よろしく願いいたします。

永井学校経営課長：続きまして、福山市教育委員会教育長吉川委員でございます。

吉川委員：吉川でございます。よろしく願いいたします。

永井学校経営課長：続きまして、広島大学附属中・高等学校長古賀委員でございます。

古賀委員：古賀でございます。どうぞよろしく願いいたします。

永井学校経営課長： 続きまして、広島大学理事・副学長坂越委員でございます。
坂越委員： 坂越でございます。どうぞよろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、広島市立中広中学校長佐々木委員でございます。
佐々木委員： 佐々木です。よろしく願い申し上げます。
永井学校経営課長： 続きまして、広島市教育委員会学校教育部指導担当部長砂原委員でございます。
砂原委員： 砂原でございます。よろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、学校法人武田学園理事長武田委員でございます。
武田委員： 武田です。よろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、絵本牧場ごんぼ館長寺西委員でございます。
寺西委員： 寺西でございます。よろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、広島県議会議員富永委員でございます。
富永委員： 富永です。よろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、広島県指導農業士会会長中川委員でございます。
中川委員： 中川です。よろしく願いします。
永井学校経営課長： 続きまして、オオアサ電子株式会社代表取締役社長長田委員でございます。
長田委員： 長田でございます。どうぞよろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、株式会社西井製作所代表取締役社長西井委員でございます。
西井委員： 西井でございます。どうぞよろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、安芸太田町教育委員会教育長二見委員でございます。
二見委員： 二見でございます。よろしく願いします。
永井学校経営課長： 続きまして、広島県立祇園北高等学校長前委員でございます。
前委員： 前でございます。どうぞよろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、特定非営利活動法人ひろしまNPOセンター副代表理事三好委員でございます。
三好委員： 三好でございます。どうぞよろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 続きまして、株式会社ソアラサービス代表取締役社長牛来委員でございます。
牛来委員： 牛来と申します。よろしく願いします。
永井学校経営課長： 続きまして、広島県高等学校PTA連合会副会長毛利委員でございます。
毛利委員： 毛利です。よろしく願いいたします。
永井学校経営課長： 本日は21名の委員の皆様にご出席をいただいております。
なお、呉市長小村委員、世羅町長山口委員は、本日は所用のため御欠席でございます。
事務局： ただいまから、会長の選出を行っていただきたいと思っております。
設置要綱第4条第1項において、協議会に会長を置き、委員の互選によってこれを定めることとなっております。
どなたか会長として適任の方を御推薦いただけますでしょうか。

(は い)

事務局： お願いいたします。
青木委員： 永年、大学で教育学について研究され、高校学校教育に造詣の深い坂越委員に会長をお願いしてはいかがでしょうか。
事務局： ただいま、青木委員から坂越委員を会長に御推薦いただきました。
皆様、いかがでしょうか。

(拍 手)

事務局： 皆様、御異議がないようでございます。
設置要綱第4条第1項の規定に基づき、坂越委員が会長に互選されました。
それでは、坂越会長、会長席へお移りください。
続きまして、坂越会長に、設置要綱第4条第3項に規定されております職務代理者を指名していただきます。
坂越会長： ぜひ、西井委員さんをお願いしたいと思うんですが、どうぞよろしく願いいたします。
事務局： それでは、西井委員、職務代理について、よろしく願いいたします。
西井委員： よろしく願いいたします。

(拍 手)

事務局： ここで、坂越会長、職務代理者西井委員、御挨拶をいただきたいと思います。

坂越会長： 御推薦いただきまして会長という大変重い役を引き受けさせていただきます広島大学の坂越と申します。どうぞよろしく願いいたします。

各方面、各分野の委員の皆さん方の御意見を集約しながら、この県の高等学校教育の在り方について、一定の方向性をぜひ確かな形でまとめていけたらというふうに思っております。

あと、私自身、先ほども出ましたけれども、今まで県の総合計画でありますひろしま未来チャレンジプラン、あれの基礎づくりにかかわりまして、やっぱりこの高等学校教育の在り方というのが、例のその人づくり施策と直結していくものだろうと思っておりますので、そのあたりで、計画の実施について、また多少でも御協力できれば大変ありがたいと思っております。

また、大学ですので、高校と大学、さまざまな連携活動を通して、県内高校、いろんなところでお世話になっております。これについても、また、そういうあたりの連携活動指針についても提供できればと思っております。

本当に重たい大きな課題なんですけれども、高等学校教育、まさに、中央教育審議会なんかにおきまして、昨年から高等教育学校教育部会ができて、小中の改革に続いて高等学校というのが、今、全国的な課題になっております。ちなみに、そこで課題になっておりますようなものが、高校生の学力をきちんと保障することでありましたり、現代社会のグローバル化の傾向にどう対応していくかというようなこと、それからキャリアの教育、さまざまな論点で整理して、今まさに検討されているところです。

やっぱり、広島県の高等学校の在り方を考える際に、そういう全国的な共有すべき課題にどう取り組むかということと、それから広島県としての、県の、やっぱり固有性、独自性、そういう特徴を踏まえた上での方向性ということも、当然必要になるかと思うんです。この2つの方向を合わせながら、ぜひ委員の皆様方の御意見をいただき、またそれを集約しながら、方向性をまとめていけたらと思います。どうぞ御協力をよろしく願いいたします。

(拍 手)

西井委員： 失礼をいたします。

ただいま御指名をいただきました株式会社西井製作所の西井と申します。どうぞよろしく願いをいたします。

非常に重い、会に、まず入ったことに対していいんだろうかという気がしておりましたところ、また会長職務代理ということで、さらに重い役職をいただきまして、本当に私でお役に立てるのかなあという気がしておりますけれども、ある意味、企業人として、あるいは一人の市民として、そういった観点の中でさまざまな形でサポートをさせていただければなというふうに思っております。

職務代理ということでございますので、坂越会長に何事もないように、ボディガードとして、そして健康面を管理する人間として、何事もないような形で、このこれからの期間を過ごせるようにサポートをしていきたいと思っております。

冗談交じりではございますけれども、改めて、今後、精いっぱい頑張ってまいります。どうぞよろしく願いいたします。

(拍 手)

事務局： どうもありがとうございました。

それでは、ここからの進行は、設置要綱第5条第2項の会議の議長は会長とするとの規定に基づき、坂越会長をお願いいたします。

坂越会長、どうぞよろしく願いいたします。

坂越会長： はい。では、ただいまから議事に入らせていただきますが、まず、会議の冒頭で、この会議の公開についての取り決めということを行いたいと思っております。

このことにつきまして、事務局からの説明をお願いします。

事務局： はい、説明いたします。

広島県教育委員会では、教育委員会規則に基づきまして、当委員会が所管をする附属機関及びこれに類似するものとして教育長が別に定める会議につきましては、審議過程を公開することによって透明性の向上を図り、開かれた教育行政を推進することといたしております。本協議会、広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会は、これに相当する会議として公開することが原則となる会議であると考えております。

なお、公開を原則といたしました場合においても、例外的に非公開とする場合もございます。例えば、個人に関する情報であって特定の個人が識別される場合、あるいは特定の個人を識別することはできないが、公にすることにより個人の権利、利益を害する恐れがある会議については、その全部又は一部を非公開することといたしております。

また、会議の公開につきましては、傍聴か議事録の閲覧のいずれかの方法により行うものとし、会議の公開の方法、又は会議を非公開とすることの決定につきましては、当協議会が行うものとなっております。

説明は以上でございます。

坂越会長： はい。ただいまの御説明のとおりなんですけれども、いかがでしょう。特に御異論がなければ、公開ということでもよろしいかと思うのですが。

その公開の方法は、傍聴及び議事録の閲覧ということにしたいと思うのですが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

坂越会長： はい。ありがとうございます。

それでは、そのようにさせていただきます。

諮問 広島県における今度の高等学校教育の在り方について

坂越会長： では、最初に、私たちのこの協議会において協議すべき事項につきまして、広島県教育委員会教育長から諮問をいただきたいと思えます

下崎教育長： 広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会様。

広島県教育委員会教育長下崎邦明。

次の事項について、理由を添えて諮問します。

1, 本県を支える人材の育成と今後の高等学校教育の在り方について。

2, 本県における今後の高等学校の在り方について。

理由。

知識基盤社会の到来、社会・経済のグローバル化の進展、少子・高齢化、環境問題など、現代社会におけるさまざまな課題に対応し、社会の持続的な発展に寄与する人材の育成が急務となっている。

こうした状況の中、本県では、平成22年10月に「ひろしま未来チャレンジビジョン」を策定し、本県を内外から支える人材の育成を目指し、諸施策を展開しているところである。

これらのことを踏まえ、人材育成における重要な役割を担っている高等学校教育について、国・公・私立を問わず、生徒一人一人が夢や希望に向かってその能力を伸長させ、また能力を開花させることにより、社会において自立的に生きるために必要な力を身につけ、人と人との絆を大切にしながら、社会に貢献できる人間を育成する、新しい時代にふさわしい教育を目指して、今後の在り方を検討する必要がある。

よろしく願いいたします。

坂越会長： はい、承りました。

諮問の内容につきましては、ただいまお読み上げいただいたところなんですけれども、もう少しこの趣旨等について共有理解しておきたいと思えますので、事務局のほうからの説明をお願いします。

事務局： はい。諮問文を御覧ください。

本協議会におきまして検討・協議いただきたい事項は、大きく2つの項目でございます。

はじめに、1、本県を支える人材の育成と今後の高等学校教育の在り方についてでございます。

知識基盤社会の到来やグローバル化の進展といった我が国及び本県が直面する状況や高校生の現状について把握をしていただいた上で、本県を内外から支える人材につきまして、10年後、20年後の将来を見通した今後育成すべき人材について明らかにしていきたいと考えております。

また、こうした人材を育成するための今後の高等学校教育の在り方といたしまして、生徒が高等学校で身につけるべき力は何か、またその力を確実に身につけさせるために、高等学校教育の目指す姿はどうかといった検討をお願いしたいと考えております。

2点目は、本県における今後の高等学校の在り方についてでございます。

1の検討項目を前提といたしまして、県内全体の高等学校の在り方といたしまして、本県において今後求められる高等学校はどんな学校か。国公立高等学校それぞれの役割はどうあるべきかなどの観点から検討いただき、その上で大学や中学校との関連を踏まえた今後あるべき高等学校、学科、家庭の在り方やその配置の方向性について検討をお願いしたいと考えております。

以上、申し上げましたように、本協議会の審議の大きな流れといたしましては、教育を取り巻く社会状況や今後育成すべき人材といった大きな議論をしていただき、その上で、国公立を含めた県全体の高等学校教育の在り方、今後求められる高等学校の姿、さらにその中で県立高等学校の配置等につきましての議論をいただきたいと考えております。

説明は以上でございます。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

諮問内容につきましての御質問もあろうかと思うのですが、それはまた協議の中でお願いすることといたしまして、次に、この協議会のスケジュールでございます。

日程について、これもちょっと事務局からの説明をお願いします。

事務局： はい。お手もとの資料、広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会検討協議のスケジュール（案）を御覧ください。

本協議会に諮問をされております検討事項は大きく2つございます。検討事項のそれぞれにつきまして、検討・協議を行っていただく会議の回数を3回として考えております。

具体的には、1、本県を支える人材の育成と今後の高等学校教育の在り方についての検討・協議を、本日の第1回から7月の第3回までの3回で。また、2、本県における今後の高等学校の在り方についての検討・協議を、9月の第4回から来年1月の第7回までの3回で行っていただきますよう考えております。また、11月の第6回会議におきましては、それまでの協議を整理する形での中間まとめについて協議をお願いしたいと考えております。

第1回から第5回までに検討・協議を行っていただきます事項が、本県の国公立高等学校全体にかかわる今後の高等学校教育の在り方に係るものでございますことから、この第6回の会議におきまして、県全体を見通した高等学校教育の在り方について中間まとめをいただきたいと考えております。

続く第7回の会議では、県立高等学校の配置の方向性につきまして、第6回までの検討・協議について一定の整理を行っていただいた中間まとめを踏まえた形で御審議をいただきたいと考えております。

さらに、来年3月の第8回では、本県における今後の高等学校教育の在り方に係る答申について御審議をいただき、3月末に答申をいただきたいと思っております。

なお、本協議会の御審議と並行して、生徒・保護者・教職員をはじめとする関係者へのアンケート及びインタビューを実施して参ります。これらの調査結果は、まとめ次第、当会議におきまして御報告をさせていただきたいと存じます。

来年3月に向けまして、お示しをしておりますスケジュールを目安として会議を進めていただきますよう考えておりますが、検討協議の状況等によりましては、変更もあり得るものと考えております。

説明は以上でございます。よろしくお願いたします。

坂越会長： 最後に確認していただきましたけれども、目安としてこういう流れでやっていくと。最終的に来年の3月に答申というようなことでございます。

何か、この進行につきましての御質問がございましたら挙手をお願いいたします。

よろしいでしょうか。

では、ほぼこういうような目安で調査・審議を行っていくということにさせていただきます。

それでは、引き続き協議を進めていきます。

本日第1回目の協議会では、本県で育成していく人材、高等学校で身につけるべき力ということで、検討・協議をすることになっております。

今日の資料、事務局のほうから用意いただいているものについて、概略説明をお願いいたします。

事務局： はい。本日委員の皆様にお配りをしております資料を簡単に説明させていただきます。資料は、資料番号1から4までの4つでございます。

まず、資料番号1の広島県の高等学校教育の現状についてでございます。

広島県内の高等学校が、事実上において過去から現在にわたってどのように変遷をしているのかにつきまして、学校数及び在籍者数、学力、体力、卒業者の進路別状況、生徒指導の面等からデータを用いてお示しをした資料でございます。

目次を御覧いただきますと、1、学校数及び在学者数は、平成2年の在籍生徒数のピークの前とその後の高等学校数及び高等学校在籍者数等の推移と、5ページのほうには、3カ月以上の生徒の留学の全国状況の資料をおつけしております。

2、学力は、学力の国際比較としてのOECDの生徒の学習到達度調査結果及び県立高校に係る共通学力テスト、国公立大学現役合格者数の資料となっております。

3、体力は、体育運動能力の全国調査における本県の状況でございます。

1ページ目次をおめくりいただいて、4、卒業者の進路別状況は、高等学校等への進学率の推移、高校卒業後の進路の推移のほか、高校生の就職率と早期離職の状況を載せております。

5、生徒指導は、暴力行為の発生件数、長期欠席者数及び中途退学者数の状況でございます。

それでは、資料番号2の資料を御覧ください。

資料番号2は、広島県勢についての資料でございます。

先ほどの資料番号1は、高等学校の基本データに係る資料でございましたが、資料番号2の資料は、広島県が人口・地域・産業等をさまざまな角度から見て、どのような県勢にあるのかに係る資料でございます。

目次をおめくりいただきますと、1、人口は、人口及び世帯数の推移と人口ピラミッドの昭和25年と平成17年の比較をしたグラフを掲載してございます。

2、地域は、県内の過疎地域の状況でございます。

3、産業等の資料は、産業別の県内総生産額や事業所数のほか、外国人観光客の推移、県内の医師及び看護職員の状況、老人福祉施設の推移と介護職員の推計の資料でございます。

また、資料番号3を御覧ください。

平成24年度当初予算の概要を御用意いたしております。

広島県が、今、何が必要であると考え、何に重点的に取り組んでいるのかが見える資料でございます。重点分野の1つでございます人づくりへの挑戦につきましては、この資料の4ページから11ページに記載をされてございます。

最後に、資料番号4、平成24年度施策と予算でございますが、今年度県教育委員会が取り組んでおります主要施策、重点施策の概要とその予算を、ひろしま未来チャレンジビジョンの人づくりの基本方針に沿ってまとめたものでございます。

資料の概要の御説明は以上でございます。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

ただいま概要を説明いただいただけでも、資料は膨大であります。高等学校教育全般の在り方ということになりますと、本当に今、多様な資料・データが背景にあると。事務局にもお願いするんですけれども、委員の皆さんの中で、こういう資料はどのようなのか、こういうデータは把握してないのかということがありましたら、また随時御提案いただければ、事務局のほうにお願いしたいというふうに思っております。

それでは、本日第1回ということですので、今日は、各委員の皆様から、ある意味自己紹介を兼ねていただいて、現在のお仕事や内容を、まあ、それに直接かかわらせなくても結構なんですけれども、本日の課題・テーマに即するような形で、最近の高校生と

か若者を見てどういう思いを持っておられるのかということ、それから、これからはどういふ人材が求められるのか、社会で必要とされているのかというようなことについて、御自由に御意見をいただけたらというふうに思います。

これが、御意見をいただくんですが、本当に申しわけないことに、時間制約で1人3分ということで、ぜひともお願いしたいと思います。皆さんの御意見いただくと、御意見、一通り御意見いただいて1時間かかりますので、その後の、少しでも意見交換の時間をとりたいとも思っておりますので、ベルチンは押しませんけれども、3分をお願いしたいと思います。

今日、いろいろ、いろんな観点から出していただいた御意見を整理しまして、また次回、また論点というような形でまとめられればというふうに思います。

早速なんですが、青木委員さんから時計回りをお願いしたいと思うんですが。

青木委員： いつも、あいうえお順で一番最初になることになるんですけども、私、4年前までは、中国新聞社の編集局、新聞記者を長くやっております、かつて、県教委の担当もさせていただくこともありまして、今、放送局のほうで営業中心なものですから、難しい問題を考えることも少ないんですけども。

今、さっきもありました若者を見て感じることに、十把一からげに高校生がどうだといわれてもいろいろ個性があるわけで、一概には言えないわけですけども、最近の若い社員を見て、とりわけ感じることは、やっぱり少々の失敗にくじけない強さ、それと競争を勝ち抜くたくましさ、つまり自立心がもっとほしいなというように感じております。

そういう意味で、本県に必要な人材についてお話を移しますと、地元の企業はアジア展開している企業がかなり多いということを感じております。そうした意味で、その辺に対応するために、郷土の歴史、広島県の歴史も踏まえつつ、日本の歴史も踏まえながら、そういうアジアのことを十分理解して、英語のほかに中国語とか韓国語とかタガログ語とか、そういったこともできる人材が、これからはもっと必要になるんじゃないかというように感じております。

この間も、ちょっとニュースで見ましたけれども、新潟の高校では、直接大学に、海外の大学に留学する支援コースがあったりとか、TOEFLの試験を地元で受けられるような仕組みにしているというように聞いております。その辺を、グローバルな人材を育てる上で、一つの参考になるのではないかとこのように思います。

あともう一つは、本県の特徴で言いますと、中山間地や島の活性化という大きな課題になってくるというように思います。そうした意味で、第1次産業に付加価値をどうつけていくかということ、これからの広島県を考える上で大事なことで、いかにそれを企業化していく人材が必要かというように思います。既に実施されている起業家精神の育成事業なんかをもっともっと充実させる必要があるんじゃないかというように思っております。

あと、最後ですけども、どんな力を身につけるかということで、最初に申しました強さを身につけるためには、いろんな知識を組み合わせる知恵にする、考える力といいますか、が大切で、ある意味知的なイマジネーション、創造力を高めるためにあるテーマをそれぞれ見つけたりして、調査や情報分析をして、それを文書にまとめてプレゼンしたりとか、それをディベートすることで対話力を身につけるというようなことも必要ではないかなと、実際に若い人を見ながら感じております。

東京都では、この震災後に、高校生に消防署を体験させたりとか、ある意味災害・被災者の状況を再現したところを体験させたりということで、ある意味社会意識を持たせようとしているようなところもあると聞いています。その辺も一つの参考になるのかなというように思います。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

では、赤岡さん、どうぞ。

赤岡委員： 赤岡でございます。

私は、7年前に広島に参りまして、今年が8年目なんですけれども、広島に来て一番思いますことは、広島というところは、非常に自然が美しく、それから経済的な産業の集積もありまして、それから文化も非常にたくさんございます。若い人たちが、そのことを必ずしもよく知ってなくて、文化があるというのは、例えば国宝建造物の数が、全国47都道府県で5位なんです。そういうこともすばらしいわけで、その中で、私は並木通りに住んでいるんですけども、朝5時、6時ぐらいにぞろぞろと学生というか、

若い人たちが帰っていくんですね。12時、1時ごろにキャアキャアと騒いでいるのはともかくとして、それから5時、6時にぞろぞろと集団、集団で帰っていくんですが、それは結局のところ、始発電車に乗るということですね。ところが、片一方のほうでは、地域の文化の伝承としての神楽で燃えている学生もいるわけですね。広島には、だから、そういう2つのセグメントがありまして、それで、とりわけ私は先ほどおっしゃいましたけれども、広島の郷土の歴史というふうなお話がありましたけれども、地域の文化というのは、広島には非常にたくさんございまして、神楽もそうですし、それ以外にも、茅の輪くぐりから、それから御承知のような花田植から、そういったものが全部ございまして、それからさらにいうと、川に橋をかけて猿猴橋という名前をつけるぐらいの、普通だったらかっぱ橋とつけますよね。ところが、その猿猴橋と名前つけるほどのすばらしい文化的な伝統があるわけで、そういったものをきちっと学生たちに持っていただいて、人づくりというときに、経済力をつけるための力も大事でありますけれども、広島県は、私は外から来たからにわか勉強ですけども、工業力は、福岡県よりも高いですね。だから、中四国以西で、広島県の経済力、工業出荷額は、1番なんですね。しかも、それが、数年前までは相当な差をつけて1番だった。ところが、おとしにかなり追いつかれて、去年追いつかれたかどうかの数字がまだ出ておりませんが、広島は、頑張らなければと思います、日本の企業が国際力をつけるということももちろん大事なんです、それはこの広島においては、広島の企業の力をつけることが、結局日本の企業の力をつけることになるだろうと思います。そのときに、若い人たちが経済的な活躍ができる力をつけるとともに、郷土の文化、日本の文化がきちっとわかっている、そして品性のある人間に育っていただくことが大事だと考えます。そして、品性がある、郷土の文化、日本の文化をきちっと知って経済的な活動をしに外国に出かけますと、外国から尊敬を持って迎えられれると思うのです。その郷土の文化については、学生たちは神楽だとかそういったことでも燃えている人たちはおります、並木通りで騒ぐ若者たちが、なぜ問題があるのかということ、興味を持てるものがどうもないようなのです。しかし、郷土の文化のところで興味を持てるものを見つけた人たちは、本気になって勉強しますし、難しい古事記だとか日本書紀文章までも馴染んでいるのです。ですから、私、ここへ出させていただいてうれしいというのは、高校生にそういう郷土の文化、日本の文化、そして品性の涵養を、そして経済力にも貢献できるようになっていただきたいと思っています。ぜひ広島から世界に向かって文化を発信して欲しい。世界に向かって郷土の文化、日本の文化を発信すると世界の民衆とつながりますので、そのことが、広島が一番大事にする、結局平和につながるというふうに思っております、そういったことを、ここで議論させていただくことを、うれしく思っております。よろしくお願ひします。

坂越会長： ありがとうございます。

では、伊藤委員さん。

伊藤委員： マツダ株式会社の伊藤でございます。人事室で、今、採用を担当しております。

採用の現場ですとか、それから最近の若手社員を見て思うところをお話しさせていただきたいと思ひます。

一般的にはという前提がつくんですけども、上の世代との対比においては、非常に素直で優しい、スマートな人が多いなという印象を持っております。言われたことはしっかり守ろうとすると、それから和を重んじる、空気を乱さない、それから、情報収集が得意と、こういったところが強みとしてあるのではないかと、いうふうに思っております。

その裏返しになるんですけども、逆に、その言われたこと以外はなかなかこうやらないというか、自分から考えて行動して動くことはできない。あるいは、課題、問題を解決していく力、このあたりに少し弱さがあるようにも思ひます。

それから、議論・競争ですね。こういったものに関しても、余り慣れていないような印象を持っております。

特に、外国人学生、最近非常に増えておりました、面接の場等で順番に見ていくことがあるんですけども、どうしてもその中に少しそういう埋没してしまうと、少しおとなしいなという印象を持ってしまふことが多いと思ひます。

一方で、その中で、すごく社内に入って活躍する人間も当然おりました、そういった人を見ておきますと、やはりちょっと2つのことがあるように思ひまして、これをぜひこれから、広島県を、内外で活躍していくという人材 身につけてほしいと思っております。

ます。

その2つと申しますのは、1つは強い心。アイデンティティーといいますか、先ほど青木委員、赤岡委員もおっしゃいましたけれども、郷土愛、母国愛というふうなところもあると思いますし、それから自分自身の力に対する自信ですね。こういったものを持って、かつ失敗を恐れないということです。かつ競争心といいますか、やはり国際的なビジネスという場に出ますと、やはり勝ち負けがつくところがありまして、その勝ち負けの勝ちにいくというふうな気持ち、こういったところをぜひ身につけていただきたい、これが1つ目です。

もう一つ目、これも重複しますが、考え抜く力ということです。

情報収集には大変上手でいろんなところでいろんな情報を見つけてくるんですけども、それを見て、じゃ、何がわかったかと聞くと具体的に答えられないという、情報をしっかり分析していく力、表面だけでなく本質を見抜く力、こういったところが、やはり活躍できる人材は身につけているよと。

社会に出ると、恐らく答えがあることというのはほとんどなくて、自分で答えを出していかなきゃいけないんだと思うんですけども、そういった力も、ぜひ学生のうちに何らかの形で見つけられれば、グローバルな競争の中でも、きちっと戦っていけるような、結果を出していけるような人材になっていただければというふうに思っております。以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

それでは、加藤委員、お願いします。

加藤委員： 広島県PTA連合会の加藤でございます。

親と、あるいはあと学校と接する機会が多ございますので、その点からお話をさせていただきます。

いろんな講演会等を企画して、最近1つ流れができてきているなと思うのが、しかるよりも褒めろということが、流れとしてできているんじゃないかと。確かに、家庭の中でも、もちろんしかることも必要なんでしょうけれども、褒めていく力というのが親の力だということをとくさん学んできたような気がします。その意味で、今まではこれが足りないからここをもっと強化しろということが非常に多い論議がなされてきたように思うんですが、逆に、我々がもう一度見直して、子どもたち、すごくいいものをとくさん持っていると思いますし、私たち日本人はまだいいものをいっぱい持っていると思うんです。そこら辺をもう一度見直して、どうすればそのよさをもっと生かせるのかということも大事なのではないかなということ、少し思います。というのが、学校教育ということで、ここが足りないからもっとここを強化しよう。何かそれをずっと連続してきた結果、今、子どもたちが何か縮こまっているような感じが、すごく受けるんです。だから、昔この日本を大きく発展させた大人たちは、すばらしい教育があったから、ここ、そこまできたんだらうか。いや、そうではなかったと思うんですね。育ていくために邪魔をしない教育という考え方も必要ではないかということも少し感じました。

それから、今、さきに述べられた方も共通するなと思ったんですけども、やはり地元の心を大切にするとか、あと1次産業とか、私たち日本人が今まで大事にしてきたものが、ちょっとなくなってきたり、経済を最優先にしてきたがゆえになくなっていくものに関しても目を向けるような観点ということもある程度必要なんじゃないかなというふうに思っております。

ちょっとぼやけた観点かもわかりませんが、大きな目でそういうふうに思いました。よろしく願いいたします。

坂越会長： ありがとうございます。

では、川野委員さん。

川野委員： エリザベト音楽大学で2年目の、2年を終えて3年目の学長です。と同時に、もう長く大学連携の組織である教育ネットワーク中国の運営委員をしております。

私、ちょうど高校2年、あ、今度高3になったんだ。高3の息子がおります。だから、最近の高校生というと、自分の子どもをまず考えてしまうんですけども、すごく、それと同時に大学に入ってくる者を考え合わせて見るならば、先ほどの各委員の先生方のお話にもありましたように、非常に熱心にいろんなものに取り組む学生もあれば、ある意味で、もう投げやりで、まあ、何とか今毎日楽しく過ごせばいいやという学生、あるいは高校生もいるように思います。また、最近の学生でいうと、これまた不足しているという御指摘もありましたけれども、問題の課題解決学習といわれるような実習体験

とか、そういうしっかりと座学で、一人で黙って勉強するということは余り得意としてないような気がします。体を使ってとか、外へ出て行ってとか、あるいは何かその場でアクティブラーニングといいますか、積極的に、単に受動的な学習でないものに非常に興味を覚えていると感じました。

広島の名前は海外に行っても非常によく知られているということは、私も前の委員様方と同じく、郷土の文化について英語ないし、あるいは近隣の外国語で語れる。そして被爆のことだけではなくて、現在の広島について各分野で語れるということが非常に大事なのではないかなと思います。

以前、私もこういう経験があります。

皆さん、ここでもし食事を黙って食べましょうと、あるいはそこにサービスされるものがあつたとしても、皆さん黙って食べようと思ったときに、こういう飲み物が回ってきたり、いろんなこう、ワンプレートで置いているだけじゃなくて、おかわりもしたいとか、黙ってもし食事をするとしたら、果たしてそれは自分のことだけを思いながら食べるでしょうか。隣近所、あるいはあの人がかししたら次の何かおかわり欲しい、あるいは飲み物が欲しいと思っているとせば、自然と自分のことだけじゃなくて、もう、沈黙の中でも周り近所のことを配慮しようと思うんじゃないでしょうか。

私は、学生たちにも、この、常に自分のことだけを考えるんじゃないで、周り近所の人たちがどうやって何を望んでいるかというのを図ってほしいと。それを態度に示してほしいんだということを伝えることがあります。音楽というのは、本来自分を主張することによってよしとされますから。でも、どれだけ友人たち、あるいは先生、先輩、後輩たちの仲間での演奏会にしろいろいろなものがともに成長していくということがあるんですけども、本県の高校生にも、自分自分ではなくて、一緒に協力してやっていくという姿勢を、ぜひ身につけていただければと考えました。

以上です。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

では、吉川委員さん、お願いします。

吉川委員： 吉川でございます。

都市教育長会の会長を代表して参りました。福山市の教育長をしています吉川でございます。

まず、子どもたちの様子ですが、小学校、中学校を預かる者として非常に気になっていることがたくさんあります。

実際に、学力的なものにつきましては、全国学力状況調査とか基礎・基本定着状況調査を見ながら、だんだんですけれども上がってきてるなということで、確実な成果が出ているというふうなことを思っております。

しかしながら、県の基礎基本定着状況調査は80点ぐらいの平均になりましたので、これから伸ばしていこうと考えたときには、やはり人間総合力をつけないとだめなんじゃないかなというふうなことを感じておりました。というのが、学力だけじゃなくて体力を含め、そして、さっき、人を思いやる心とか、そういったトータルとして人間力をつけなければ、もうここから先伸びないんじゃないかなと、平均ですよ、平均では伸びないんじゃないかと、そんな感じさえ、今、しております。そして、この本日いただきました資料を見させていただいても、高等学校の、いわば国公立の大学の進学者数とか、あるいは全国試験ですか、共通試験ですか、その試験の平均点より上の子どもたちの数が、おおむね、どうですかね。レベルになってきました、同じぐらいになって、少し若干下がりぎみになってきた、そういうふうな状況がある中で、やはり私どもとすれば、小学校、中学校の教育をどうやっていくかなということが、随分課題として本当はその下にあるのではないかなというふうなことを感じ感じ見させてもらいました。

小学校、中学校におきましても、福山市の中学校、問題行動を起こす子どもがたくさんありまして、毎年逮捕者が出ております。そういう状況なんですけども、学校の中に行きますと、ほとんどの者がきちっと勉強をしています。きちっと勉強すれば、する雰囲気であればできるだけ、そこへ入りにくくなって、いわばアウトローするだけのような形になってくるというんでしょうか。なかなか教室へ入れない状況が出てきて、じゃ、外で、廊下で、あるいは廊下まで入れなくなってきたときには、体育館の裏で。体育館の裏に入れなければ学校へ来ないとか。そうすると、教師が、やっぱり外まで行ってから子どもたちに対応しなければならぬといった状況もたくさんあります。

しかしながら、その子どもたちは、案外エネルギーを持っています。うまいこと組織

化してやったり、あるいは活躍する場を与えてやれば、もしかすると非常に大きなエネルギーを発揮するのではないかなというふうなことを思います。学力的に高い子どもたちも、おとなしいという話、ちょっとありましたけれども、そのおとなしさとエネルギー合わせた、もっと子どもたちをつくりたいなというふうなことを思います。そういう意味でも、学力的に厳しい状況の子どもたち、きつといろいろないいものを持っているんだろうなと思います。

ふだん、小中学校を対応しておりますので、高等学校の様子はなかなかわかりません。しかしながら、福山地域で言いますと、芦品まなび学園のような、こうした生徒にも対応した、随分頑張っている学校もございます。そういった学校がどんどん増えていくてくれればいいなというふうなことを、この高等学校では感じながら、この資料を見させていただきました。

以上でございます。

坂越会長： ありがとうございます。

では、古賀委員さん、お願いします。

古賀委員： 附属中・高等学校の校長をしております古賀と申します。兼務で、大学のほうでは教育学で、今、会長の坂越先生と同じ講座に所属しております。専門は教育行政学ということで、国のとりわけ教育政策等を研究しておりますけれども、会長さんがおっしゃったように、議論を整理するという意味では、やはりその全国的な高等学校を取り巻く状況と、それから国内だけにとどまらないで、国際的な状況ももちろんあると思いますけれども、本県のみ状況と、やっぱり2つ分けて考えるべきだろうと思います。

私は、やっぱり一言で集約をすれば、ただいま現在の学習指導要領、新学習指導要領が、そのうたっている内容が、各委員の方々がおっしゃっていることを、大体包括しているなというふうに理解しています。

釈迦に説法かもしれませんが、新学習指導要領は、生きる力ということを行っています。この生きる力ということの根源は、まさに各員の方々がおっしゃっている自分で考えたり判断をしたりするようなことを、当然含むわけでありまして、それから、知識基盤社会の中でどう国際競争力をつけて生き残っていくかということにも、結局かわるわけでありまして。こういう言い方非常に乱暴ですけれども、中教審の委員の先生方も、ばかじゃありませんから、当然、我が国のやっぱり教育政策という観点から、このことをしっかりやっぱり認識し、意識し、そして今度の指導要領にそれを落とし込んでいます。

したがって、まず本県の教育云々というよりも、公教育ということの観点から考えたら、本県を含めて、やっぱり新学習指導要領に示されている理念であるとか、あるいはその思想というものをしっかりと具現化していく責任が、やっぱり本県も公教育機関の一貫として高等学校にはあるだろうというふうに思います。

じゃ、もう一つ、じゃ、本県特有の、固有のものはあるのかなのかということですが、私は、残念ですけれども、本県だけの問題ということは、多分考えにくいですが。ただ、しかし、やっぱり本県の置かれている県勢の問題等を考えると、力点を置くべきところがあるでしょう。

したがって、私のイメージは、新学習指導要領をベースにしながら、どこを本県が特に力点を置くのか。選択と集中といいますから、その中の満艦飾ですべてに力点を置くというのは、なかなかやっぱり財政的にも厳しい。とするならば、どこに力点を置くべきなのか、そこをやっぱりもっと議論して、焦点化すべきじゃないのかなと思っています。

私自身が、今、附属中・高の校長に着任して2年目ですけれども、大学でもそうですし、中高でもそうですけれども、やっぱり知事もおっしゃっていますが、グローバル化ということは、やっぱりこれは避けて通れないだろうと思います。その中で、各委員おっしゃるように、国際競争力というもの、やっぱり企業人の方々が一番間近に考えられている、感じられていることなのでしょうけれども、やっぱり大学もそうです。昔は、いわゆる、南方特別留学生みたいに優秀な学生もいましたけれども、そこと日本人の学生の力量差、そうあったと思いませんが、今は学生を見ていて、留学生のほうが、はるかに力があるんじゃないのか、感じる人が多いんです。企業の方が外国人を積極的に登用しようとするのも、さもありなんと思います。私の中高のPRになるかもしれませんが、SSHという国の開発指定を受けております。研究開発の指定ですが。これを利用して、いろんなところに子どもたちを連れていくんですけれども、とりわけ東

アジア、つまり中国であるとか韓国の高校生と交流させると、その力量差が歴然です。そんな広島大学の学生においてもそうでありますけれども、附属、口幅ったいですけれども、県下でもトップクラスの学力だろうというふうに認知されているような附属の子であっても、例えばかの地の北京師範大学の付属の高校生とお互いに英語でディベートさせたら、もう全く歯が立たないという状況があります。こういう、いわゆる学力差というものが、やっぱりこれからやっぱり日本の国際競争力勝ち残らせていくためには、どうしてもやっぱり埋めていかなければならない。私は、学生に言っているんですけれども、勝たなくていいと。負けるなというのを信条にして、とにかくやりましょうというふうなことを言っております。

もちろん、日本の文化も大事でしょう。日本人としてのアイデンティティーも非常に大事だと思いますけれども、まずはやっぱり目の前の力点をどこに置いて、本県の施策を今後展開していくのか、高等学校教育においてどこにその力点を置くのかということ、やはり、そのあたりから議論していったらいかがなんでしょうか。

私の意見は以上です。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

それでは、佐々木委員、よろしく。

佐々木委員： 失礼いたします。

中広中学校の校長、今、3年目を迎えております。校長そのものは今9年目に入っておりますが。

私、先日、文部科学省のほうから時報が出ておまして、その中に、15歳から24歳までの完全失業率という数字が出ておりました。平成22年の統計で、総務省のほうの統計だったんですが、9.6%という数字がありました。同じ15歳から24歳までの非正規雇用者の人数が31.5%という数字が出ていて、大変びっくりしたことがあります。

先ほど、各委員様のほうから話をされましたけれども、本県の課題はもちろんですけれども、やはり全国的に、本県の内外というふうにありましたので、全国的にも視野を広げながら、本県の課題というものを見ていく必要があるのかなと思っております。

たくさん課題があるんですが、私はもうとりあえず、子どもたちに自尊感情、横文字でいいますとセルフエスティームというふうに言いますが、自己有能感とか自己肯定感とか、いろんな言葉で訳されてますけれども、自分もまんざらでもないという感覚ですね。私の、中学校のほうもそうなんですが、中学校3年生卒業するまでに、自分の夢、あるいは目標がはっきりしないという生徒もいます。だけれども、それが見つかったときに、一生懸命全力で走っていけるというか、そういったものが要るんじゃないかなというふうに思っております。

ここは高等学校ということですので、中学校までの義務教とは、多少ニュアンスが違ってくるかもしれませんが、やはり継続性ということで、県の中学校長会も、あるいは県には小・中・高等学校を横断する県公連というのがあります。その中のいろんな研究・検証をさせていただいておりますが、やはりそういう縦の並列も含みながら、連携も含めながら高等学校教育の在り方というのがお話できればいいと思います。

あともう一つ、先ほどからも出ていますが、ALTの教師が学校に来て、いつも、私、感想を聞いたりするんですが、どうかというと、日本の中学生といますか、非常にシャイだというんですね。自分の言葉で、多少英文の文法的に間違ってもいいから、もうあれこれば一つと言っていくという、そういうのがないなというのが、もう異口同音に言われます。そういう点では、そういうところを何とかできないかなというふうに思っています。

的を射ませんが、また後ほどまたいろいろ発言できたらと思います。

以上です。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

それでは、砂原委員さん、お願いします。

砂原委員： 私は、広島市の教育委員会のほうで、もう10年ぐらい勤務しております。幼稚園から小学校、中学校、高等学校の教育のほうの推進にかかわっているという立場でございます。

私、最近の高校生、若者を見て感じるという、感じられることは何かというふうなところでお話いたしますけれども、いろんな高校生の姿を見たときに、社会に貢献したいという意欲は何か持っているような感じがします。いろんなクラブ活動とか、授業の中で身につけた能力を地域で発揮をしていく。その中で、生徒の目が輝いているし、地域

の人からいろんな、拍手とか声をかけられて自信がつながる、それが自信につながって
いってる。さらに、それが、また一つのことに打ち込むことの原動力につながっている
という、そういった社会に貢献したいという意欲は感じます。

それから、技術革新がもうすごく進んでいく中で、対応、電子機器にすごい対応して
いく力があるなどということと、それから、ブログとかツイッターなど対話メディアを活
用して、自分の情報発信していくという力、これはあるなと思います。先日、海外の修
学旅行へ行った高校生が、市長に、どのようなことを学習してきたかというプレゼンテ
ーションを市長に対してやりましたけれども、タブレット端末を駆使して、本当に、限
られた時間の中で中身のあるプレゼンテーションを、高校生は堂々とやっていました。

そういったところから、プレゼンテーション能力とか表現力、これはあったと思います。
しかしながら、一方で、インターネットなどの情報なんですけれども、偏った情報を
うのみにして行動してしまう。だから、多様な情報を比較検討して判断する部分、こ
こはちょっと弱い部分があるんじゃないかなということ、一方でも感じます。限られた
情報のみで判断して行動してしまう面があるのじゃないかなといったところ。

それから、人間関係づくりの体験が希薄で、人間関係でいったん崩れたときに、それ
を修復する場合に、非常にこう苦労している生徒の姿も見ます。

しかし、大事なことは、現代の若者が持っている、高校生が持っているよさに着目し
て、そのよさをさらに伸ばしていくことを通して、さまざまな事象に対して解決してい
く能力、これを身につけさせることが大事なんじゃないかなというふうに思います。

そして、先ほども言いましたけれども、環境と指導者に恵まれたら、すばらしく高校
生は、能力を伸ばしていくなと思います。ですから、力を発揮するような環境とか、活
躍の場をどんどん与えていきたいなというふうに思っています。

それから、どんな人材が必要かということなんですけれども、やはり粘り強く探求する意
欲、そういったものが大事だというふうに思います。困難な課題とか新たな事象に直面
したときに、それを解決したりいい方向へ持っていくためには、やはり困難な場、事象
から逃げていてはだめなので、真正面から向き合っていくと。そして、粘り強く解決へ
向けて取り組んでいく、そういった人材が必要だというふうに思います。

そして、困難な課題を解決していくときに、1人、個人の力では限界がありますので、
自分がやっぱり他者と共同していく力であるとか、それから、他者の持っている能力を
結びつけて組織的なものにしていく、まあ、そういったリーダー性みたいなものも、大
事なことだというふうに思います。

それから、社会の発展とか地域に貢献できるような人材という意味では、科学である
とか文化であるとかスポーツとか、どこかの分野で秀でた能力、知識とか、技能とか、
そういったものを有した人材が欲しいなというふうに思います。そのどこかの分野で秀
でた能力というものを、地域の文化活動であるとか、あるいは地域の体育行事である
とか、あるいは学校教育の面でいろいろその能力を還元できる人材。そういった自分の持
っている能力と技術を提供できる人材というのが大事ななというふうに思います。

それから、やはり、外国の人と交流を深めるために必要な語学力、これは不可欠では
ないかなというふうに思います。そして、社会貢献していく場合に、やはり人を思いや
ったりとか、公共の精神を身につけた人材というものも大事だというふうに思います。

ちょっと、まとまらんかったかもしれませんが、以上です。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

では、武田委員さん。

武田委員： 武田でございます。広島県私立中学高等学校協会のほうで会長を仰せつかっておりま
す関係から、この協議会に参加をさせていただいていると思っております。仕事は、学
校法人武田学園でございますけれども、よく、黒瀬町にございます武田中学・高等学校
と勘違いをされる方がおられますが、そうではありませんで、可部に、広島市の可部町
にあります広島文教女子大学、それからその高等学校、幼稚園、これの運営母体でござ
います。また、要らんことを一つつけ加えますと、親戚なのかということとはよく聞かれ
るんですが、決して親戚ではございません。そういうことで、要らんことを言いまし
たけれども。

本県で目指すべき人材像ということなんですけれども、その前に、少しだけお時間い
ただきまして、広島県の私立学校、今、どういう状況なのかということをお話をさせ
ていただければと思います。

お手元の資料にもさまざまなことが出ておりますけれども、生徒数、学校数でいいま

すと約3割、広島県の高等学校の3割を私学が担っております。それから、私立学校ですけれども、もう御存じのとおりなんですけれども、私立学校は、それぞれの学校の独自の教育理念で特色教育を推進する、こういったものでございます。例えば、宗教に基づいた道徳教育を推進する学校、スポーツを通して人間教育を応援していく学校、中高一貫校、そういったさまざまな独自の教育理念でもってそれぞれの特色教育を推進しているのが私立学校でございます。

そういった中で、この協議会におきまして、広島県で育成すべき人材像、そしてその人材を育成するために国公立がどういう役割を担っていくのかということが協議をされるということですが、ぜひ、私どももこの協議会を通して、提案、答申をされたことに対して、それぞれの私立学校が、これ、一律というわけにはまいりませんが、それぞれの学校で考えて、この答申に答えるべく教育は推進できるんじゃないかと、このように思っているところでございます。

さて、本題の本県で育成すべき人材像なんですけれども、先ほど古賀先生がおっしゃられたことが、私、すべてではないかなと思っておりました。要するに、中教審の答申、それから学習指導要領等で求めている人材像、平成15年の学習指導要領の改定では、確かな学力ということが言われておりました。思考力と基礎基本のバランスだということで、また、このたびの改定では、それを継続して、先ほど古賀先生おっしゃられました生きる力をつけるんだということです。基礎的、基本的知識・技術の習得と、これらを活用して課題解決するための思考力、判断力、表現力などを育成するということです。そして、これらのことに主体的に取り組む態度を身につけると、こういったことが学習指導要領に書かれているわけですが、まさしくこういったことを広島県でもやっていけないといけない、このように思っております。

そして、一つだけつけ加えると言いましたら、それらを身につけるための土台となる人間性の部分、これが必要なのではないかと思います。この人間性は、もちろん高等学校教育だけでやるものではありませんで、教育が担う大きな役割だと思っておりますが、また学校教育だけが担うべき問題ではなくて、御存じのように、地域・家庭、そして学校が三位一体となって身につけさせるべき力ではないかと思っております。

しかしながら、御存じのように、近年は地域の教育力、そして家庭の教育力が落ちてきていると言われております。そうであるならば、学校教育が担える部分があるのではないかと、このように私は思っております。

そういった部分も含めて、本協議会で検討ができればなど、このように思っております。よろしく願いいたします。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

では、寺西委員さん、お願いします。

寺西委員： はい、寺西と申します。絵本牧場ごんぼということで、皆さん方、役職読ませていただきまして、すぐわかります。ただ、私の場合は、本当にはなマークが随分ついてらっしゃると思うんですけれども、そうです、本当に牧場をやっております。庄原という過疎地域という形で、もう先ほどの地図の中にも書かれておりますが、庄原は中四国合わせても、本当に一番大きな面積を持つ市ではありますが、人口的には、やはりいろんな問題、課題ありまして、高校もありということでお話をさせていただきましたら、本当にいろいろな課題を背負っております。私がこの場所へというのも、本当に申しわけなかったんですが、長年幼児教育を、そして学校現場ですとか、そして学校の支援学級や、そして中学校、高校の非常勤、そして今は大学のほうの非常勤という形では、一瞬一瞬ではありますけれども、携わらせてもらっております。なかなか、皆さんのような知識というか、いろんな幅広い認識はないんですが、ただ、私たちが牧場の中で、いろんな自然体験をという形の活動を通してやらせてもらっている中で、子どもさんたち、高等学校の子どもさん、若い方々、いろんな方々と接することがありますが、今、皆さん方がおっしゃったように、情報を収集する力、それからそれを処理する力、それを発信する力、すごいすごいアイデアもありますし、新しい起業をされておられます若い方々の姿を見ましても、今の現代に本当に心をキャッチできるような、さまざまなアイデアを持っておられることは、本当に思うんですけれども、私たちが野外の活動で無人島へ行きましたりとか、山の中の何にもないところで活動をしたりとか毎年やっております。その中で見えてくるものがあります。本当に、確かに、さまざまな情報を得ることは、子どもさんたちできるんですけれども、そのときに一を聞いて十に。そして、本当に、一を聞いたなら、一という形で終わってしまう子どもさん、随分多

くなりました。もう何十年来子どもさんたちと携わせてもらっているんですけども。そして、万が一、注意をされたりしかられたり、いろんなことで自分たちの活動がストップかけられたときには、本当に子どもさんたちの状況が一変して、落ち込んでしまったりとかというような心の弱さというものも随分見えてきております。そして、コミュニケーション能力というのはよく言われますけれども、子どもたちが会話をして、どう取り組んでどう解決していくかという力が、随分低下しているのではないかと思います。無人島なんかに行くと特にわかります。教育現場に教育のプロ、プロというか学生さんたちがいろいろな形で参加いただくんですけども、教育学部の子どもさん、そうではない子どもさん、お互いチームを組みながら、小さな子どもたちを数日間無人島という形の中で暮らしていく中で、確かにテクニックは物すごい素晴らしいんです。でも、徐々に差がついてくる部分があります。そのときに、何があるのかというと、やっぱり人の魅力というか、生きる力というの、先ほどからも随分おっしゃっておられますけれども、魚をとってくる、どういうときにどう対応する、子どもたちをどう、教育的な観点では本当に雑というか、弱い部分もいっぱいあるんですけども、そのときの本当に力が見えてくる部分、随分あるんです。そのときには、やはりこれは幼児教育の現場では、ロバート・フルガムさんという方がおっしゃる言葉、「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という言葉があります。本当にその砂場という場所での体験を通してということで、その人生の軸はすべて終わっているということもあるんですけども、さらに高校で何を身につけていくか。そのときに、やはりいろいろな生きた体験、五感を通した体験、その現場でというような形で適応していく力、そして判断を、瞬時に判断する力、そしてそれをどう行動に移していくか。本当にそういうことが、どういう現場に行っても、人材という形では必要となると思います。いろいろな文言があると思うんです。必要な人材というのはありますが、すべての人々を、またそれをどう生かせるかという人材というか、そういうまたさらに違う観点での人材というのも求められている部分ではないかなと思います。

なにぶん不慣れで、何か内容的にも皆様の話がされている部分がくどく出るような部分もありますけれども、この席につかせていただいた限りは、もう本当に一生懸命いろんな形で高校の在り方を検討させていただければと思います。

坂越会長： ありがとうございます。

すみません。富永委員さんの発言前にこういうことは恐縮なんですけれども、前半の時間と後半の時間が違ってしまうというとてもないことをお願いしたらいけないんですけども、9人の方を残しましてあと40分ほどで。皆様の御発言がいただけますように、御協力をお願いいたします。

富永委員： わかりました。はい。

私、県議会議員の富永といいます。

私、いわゆる文部省の是正指導がありました平成10年ですけれども、それ以来、県議会の常任委員会は文教委員会、1年間を除いて、あとは全部所属をしまりました。そういったところから、先ほど委員の先生方からさまざまな御指摘ございましたけれども、私、それでは、学力の問題をちょっと取り上げさせてもらいたいと思います。

資料の中でも学力の国際が、日本の生徒の学力が、低下傾向が著しいということが読み取れます。国力の低下と比例しているんじゃないかというふうにも思えるわけですけれども、この学力といいますと、かつて本県広島県では、長い間にわたって、何からの学力をつけるということは悪いことだというような言われ方をしてきたというふうに思います。平成10年、文部省の是正指導を受けて、教育委員会を中心に全力で教育改革に取り組み始めた。しかし、そのころで、取り組み始めたその後においても、当分の間ですけれども、その文教委員会で学力についていろいろ質問がなされます。しかし、当時の教育委員会は、皆さんも信じられるかどうかわかりませんが、この学力という単語を、本当に慎重に避けて、触れないようにしていたのが実態なんですね。学力のの字も言えない時代が本県には長くあったということは、我々は忘れてはならないことであろうと思います。

その後、学力向上への取り組みは、本県教育の大きな柱になって、一定の成果を挙げてきたというふうに評価はいたしておりますけれども、それまでの間に失われたものは余りにも大きかったというふうに思います。

長くなってはいけませんが、当時、あるガソリンスタンドの経営者が、高校卒業生、頼まれて採用したんですけども、九九もできないのはどういうことかと、学校は何をや

っておるんだというようなことも言われたことがありますし、今日は大学の先生方もいらっしゃいますが、大学に入ってきて、高校時代のレベルの補習をしてやらないと授業についてこれないんだというようなお話も伺ったこともございます。

そういったことで、教育というのは、その成果が出るのも、時間もかかりますし、またそのなされた教育の影響というのは大変長期に及ぶという、大変重要なものであると思います。いろんな力をつけなければならない、皆さんおっしゃるとおりでございますけれども、私は特にこの学力についても、今後根気強く取り組んでいくということは主張をさせていただきたいと思います。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。すみません。

では、中川委員さん、お願いします。

中川委員： 簡単に。いたって簡単に。

指導農業士というのが、ちょっと説明しておきますけれども、農家の子どもを、若い子を指導するという役割をもらっているんですけれども、おもしろいことに、農業高校を出た子というのは、農業をやってもある程度まではいくんですけれどもそれ以上伸びません。それよりは、普通科高校出たような子がね、考え方が柔軟なんですよね。それで伸びてくるんですよ。僕は、そういう、今からもう農業も、日本国内だけではなくて世界を相手にしていかなければならないんですよ。その世界を相手にしく場合に、いかに頭が柔軟か、そういう子どもが育ってほしいんですよ。高等学校では。基礎は必要だけれども、基礎をマスターしたら、それからある程度いろんなことを考えられる頭を持った子どもというのが、僕は必要だと思っています。

農業を本当にうまくやっている子というのは、いろんなところに出しても絶対通用すると思うんですよ。恐らく、マツダへ入れてもいい社員なと思いますよ。そんな子がいます。本当ね、やはり、農業をやるというのは、ものを育てるだけじゃなくて、いろんなことの、頭の中に、気象学、地質学、そして生物のいろんな生態系、そんなものを全部マスターしないと、仕事のうちでは土木も建設業にもならなきゃ、大工さんもやらなきゃ、水道もやらなきゃいけない、電気工事もしなきゃ、全部マスターしなきゃいけないんですよ。そういういろんなことができる人間でないと伸びてこないんですよ。やはり、学校ではそういうのを育ててほしいし、また、僕、小学校、中学校、先生方をよく見るんです、高等学校も同じだと思うんですが、余りにも学校の先生が、学校の生徒に教えること以外の雑用が多過ぎると思うんですよ。それに時間とられて、子どもに教えるのがちょっとおろそかになるんじゃないかという気はしています。その辺を、いかに学校の先生を楽にしてあげるかということは、本当に大事なことだと思いますよ。

そういうふうにして、農業をやる。

それともう一つ、外国の子どもと日本の子ども見たときに、僕、しょっちゅう、年に3回、4回、外国出てます。いろんなところに。その外国の子どもを見たときに、東南アジアとかいろいろ、南米のほうも行きますし。見たときに、小さい子どもが、目の輝きが全然違います、日本の子どもと。日本の子ども、全部が全部目の輝きが悪いというんじゃないんですが、外国の子どもというのは、本当にすばらしい、本当ほれほれする目してますね。皆さんもそう感じられることないですか。やはりそういう子どもたちに育ててほしいです。

以上です。まだいろいろあります。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

長田委員さん、お願いします。

長田委員： オオアサ電子の長田と申します。

過疎地、また中山間ということでこの席にいるんじゃないかなと思います。

私は、オオアサ電子というんで、北広島町に合併いたしました、大朝町というところで生まれて、現在、そこに住んでおります。ちょうど30年前にあるきっかけから起業することになりました。私は、頭の非常に悪い人間だったんですが、大学では法律のほうをやっておりました。しかし、なぜか会社設立はエレクトロニクスのほうということで、30年間、ちょうどLCD、液晶をつくって現在も来ております。やってまいりました。まじめにやれば、とにかくいけるんだという感じでやっておりましたけれども、このリーマンショックというのは非常に大きく、約250名の社員がいた中で、まんまと大手企業は海外に出ていったということでありまして。うちは解雇せんよということで、現在、小さなメーカーとしても頑張ろうということで、いろいろ奮闘しておる段階でございます。

す。

その中で、地元におりながら、私らみたいな劣等生が、地元の、母校でもあるんですが、新庄高校という田舎の103年ぐらいたつ学校があるんですが、その理事として、やっぱりまた私学の難しい学校経営にも携わっておったり、また北広島町の、これもまた私らみたいな劣等生が何でなるのかなと思うんですが、町の教育委員ということで、いろいろ学校現場を見させていただいております。

しかし、中小企業として、今、非常にやっぱり危機感を持っておるのは、やはりこのままだったら日本だめになるんじゃないかというのが、やっぱり一番あります。都会でいい大学を出て帰ってくる人を見ても、もう魂も精神も皆抜かれて帰ってきて、1年、2年すれば他界するという人が連続出てくるわけですよ。もう少しやっぱり社会構造を変えていかないと、今のシステムだけに流されている、もう人間を無視した今の世の中というのにどうにか歯止めかけないかんのじゃないかなということがあります。その中で、企業とすれば、日本も捨てたものじゃなしに、やっぱり企業でも元気な企業はたくさんあります。その中で、やっぱり京都の企業というのは、非常にやっぱり独自性を持っております。その一つの特徴は、やはり郷土愛がすごいです。昔の都ということがあったのかもわかりませんが、やっぱり東京に物すごいライバル意識を思っています。本社を絶対東京に移さんとかですね。これがグローバルにどんどん行ってます。名刺交換しても、200年、300年の会社、幾らでもあります。ですが、うまくやっぱり時代対応しているというのは、やっぱり人間力というか、ものすごいものがあるんじゃないかなという気がします。

それで、今日、時間がありませんので、私は、小さな企業の立場から、実際に海外出ても、第一線でやっている中で、やはり今日のテーマだけで、一つの県内外の育てる人材とか、いろいろあるんですが、やはり学校とかいろいろなところがきっかけづくり、子どもを育てるきっかけづくりの場じゃないかなという感じがします。OBでもすばらしい人がいたら、だれでも活用すればいいと思うんですよ。学校の先生だけがやる必要ないと思うんですよ。

それで、今、海外でどんどん活躍されておる、されておるというんですが、私の目から見れば、国家意識が余りにも人間に薄くて、魂まで全部海外へ出してしまふから、日本は自滅になっているというのが、ま、私の感じ。とにかく、学校時代に、やっぱり国家意識をつけないかん。ですから、高校で身につける力というのは、私は、やはり愛国心という、さっき出てましたが、やっぱり会社も愛して学校を愛する。母校も、自分の出た母校を、また帰って訪れたいとか、そういうような人材を育てていくのが、知識とか何とかっていうのは、それぞれみんな違うと思うんですが、やっぱり愛することというのが、一番必要なんじゃないかなというように思います。

ちょっと私の回路がピントが外れておるかわかりませんが、またひとつ、よろしくお願ひいたします。

坂越会長： いえいえ。ありがとうございます。

それじゃ、西井委員さん。

西井委員： 失礼をいたします。

もっと小さな会社の西井製作所の西井でございます。広島市宇品のほうで製造業を営ませていただいております。

仕事以外に、広島青年会議所という団体の属しておりますして、2010年に広島市の理事長をさせていただきますして、昨年、広島県の会長をさせていただきますして。一応、またサイゴで青年会議所活動しておりますので、日ごろお世話になりましてありがとうございます。

企業という立場の中で発言をさせていただきたいなというふうに思いますけれども、私は、高校生というよりも、これからの若者に対しては、人を動かす力、リーダーシップといいますか、そういったところを身につけていただきたいなというふうに思っております。ただ、これを一番阻害しているのは、子どもたち、学生ではなくて、教員であり、我々企業といった大人たちではないかなというふうに思っています。例えば、企業の中でとらえれば、例えば上位者、あるいは先輩が後輩に対して指示を出す、業務の指示を出すときに、普通の業務であればあるんですけども、先輩だから聞かなければいけない雰囲気、上位者に対しては物が言えない雰囲気の中で業務が遂行されていく。あるいは、もっと行けば、そこに恐怖というものが入り込んで、ノルマという数字のもとで、ノルマを達成しなければ給料が減る、あるいは首といった、そういった権限である

とか恐怖という中での人の動かし方というのが、結構多いのではないかなど。結果、そのゆえ、その人というのは、言われたことしかやらない。あるいはごまかす、インチキする、偽造する。あるいは耐えられなくてノイローゼになって死んでいくというような連鎖反応を起こしているのではないかなどというふうに、私は感じています。これは、こういった大人たちが接する子どもたちに対しても同じような傾向が出ているんだろうと。結果的に子どもたちが企業や学校から出ていったときに、先ほど来出ているように安定を求めてチャレンジをしない。あるいは自分自身で考える力がない、そういったところにも結びついているのではないかなどというふうに思っています。ある意味、やはり、自分自身が向かうべき方向、夢や目標、そういったものを掲げて、そこに対して向かって行きながら、人と協力をする、そういった共通の思いの中での行動をしていく力、人を動かしていく力といいますか、リーダーシップといいますか、そういったところがやはりもっとも身につけていくということが、これは学生というか全般的につけていかなければいけないことではないかなどというふうに感じております。

ちょっと、的が違いかもかもしれませんが、私の意見です。

坂越会長： はい。ありがとうございます。

では、二見委員さん。

二見委員： 私は、町教育長会の代表ということで来させていただいているというふうに承っております。

県内9つの町がありますけれども、我が安芸太田町は県内で一番人口の少ない、しかも高齢化率が一番高いという、非常にいろんな意味でのトップを行っているわけですが。

さて、私、どうしても、高等学校の問題を考えるときには、今後の在り方の問題にもかかわってくるんですけれども、中山間地域や島の中にある町として、高等学校は県立であっても町の高等学校と言わざるを得ないと思います。そういう中で、どの高等学校も、少子化と、それから多くの卒業生が都市部の高校へ流出するという中で、定員確保というのは大変難しい問題がある。残って地元でやっている、頑張っている子どもたちの課題とすれば、親や近くの人たちの職業を見て将来を考えますので、極めて狭い職業感、身近にいれば、役場か土建業か、幼稚園や保育所の先生というふうな親の姿。それ以外の職業は余りないわけですから。しかも、零細農業でそれが職業にならないでいるとなれば、子どもたちの夢はとても狭い中で将来像を描いている。というのが、地元にいる子どもたちの課題かなどというふうに思っています。そういう中で、都市部にある高等学校と中山間地域の高等学校の子どもたちというのは、一緒にはできないのかなどというふうに思っています。ただ、やっぱり大事なものは、先ほど皆さんから出てますけれども、郷土に対する愛情といいますか、郷土、これを思う、そういう高校生であってほしいなと思いますし、それから、自信を持つ、物事に自信を持てる、自分はその地域で学んで、もう自信を持てるというふうなことが、これ大事だと思っています。そのことが、将来町を出て都市部で就職しても、必ずや長い時期考えれば、ふるさとへ帰ってこれる、そういう子どもたちを育てる必要があるかなどと思っています。

そういう点では、今、中山間地域、あるいは島嶼部でやっている中で、一つの取り組みは、神楽甲子園とかというふうな、地元の伝統芸能を守りながら、地域の人たちとつながりを持って頑張っている。あるいは、私の町には、高等学校では県内で唯一のライフル射撃部があります。ですが、なかなかマイナーですから、県内での大会できないと。そういう神楽であったりマイナーなジャンルをやっている子どもたちをどのように日の目を、光を当ててやるかというふうなことで自信を持たせたり、自分たちの町や高校に誇りを持たせるといふふうなことが、私は必要なかなどというふうに思っております。

島嶼部、中山間の小さな高等学校では、これから地域と共存する高校生になってほしいというふうに思っています。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

前委員さん、前校長先生は、まともな当事者なので、ちょっといいですか。御発言、よろしく願います。

前委員： はい、失礼をします。

祇園北高校の校長でございます。私は、昭和52年に高校の教員として採用されて、以後、ずっと現場で子どもたちとかかわってきたわけでありまして。当時の高校生は、今、社会に出て随分活躍をしています。今の高校生を見ると、どうしても当時の高校生、昭

和50年代の高校生を見ながら比べてしまうと、そういうことで、やはり当時の高校生はいろんなことができたんだなということは、思っているところでもあります。そういうことを考えながら、これからも考えていかななくてはならないということを思っていますけれども。

テーマでありますのは、今の高校生を見て感じることですけれども、本当にさっきから出ているように、本当に素直で従順だと。非常に指示によく従うと。当時はそうでもなかったんですよ。随分指示をしてたかなと。いい言い方をすればそうだけれども、逆にいえば、指示を待っているとか、自主性が欠如しているということはあるんだろうというぐあいに思っています。

それともう一つ思うのは、だんだんと心が弱くなってきているなということを思っています。挫折の経験ってない。あるいは挫折をしたときに、立ち直すすべを知らない。もう終わってしまうというような生徒が増えてきたのかなということも感じます。それが、一番、昔の高校生と比べて違うところかなということを思っています。

この辺については、やはり生き方の問題部分でありますので、普遍的な部分もありますので、やはりこれからもそういう生徒は育てほしいなというぐあいに思っているところでもあります。

今、将来のことに向けて高校生も夢を持っていろいろやろうということを思っていますけれども、その夢の持ち方についても、本当に単なる夢ということだけで、本当にそれを実現しようと思っているのかという、夢というか、希望というか、その程度のことしか持てないような生徒もふえているのかなと。もちろん、しっかりした夢を持っている生徒おりますけれども、そういう、やはり将来社会に出てどうするんだということをきちんと考える生徒、これも減ってきたし、これをまた育てていかななくてはならないというぐあいに考えているところでもあります。

今、高等学校では、いろんなタイプの学校がありますけれども、すべての県立学校では、今のようないろんな課題についてそれぞれ学校の特色を出しながら取組を進めているところであるというぐあいに私は思っているところあります。

もちろん、当時と比べて環境の変化、社会の変化、あるいは保護者の方々の意識の変化等々もありますので、昔と同じようにはいかない部分もありますけれども、やはりこれから、やはり自分自身のために頑張れる生徒、人のために頑張れる子ども、あるいは地元のために頑張れる人間、こういうものを、やはり最終的にはつくっていききたいというぐあいに思っています。

まさに、社会に出て貢献できる、活躍できる、そういう人間を育てていきたいということを考えていますし、それがひいては世界を相手に渡り合える人間になるのではないかと考えています。まず自分、まず地元、そして世界にというステップをやはり挑んでもらいたいということを思っております。

これから、子どもたちには、まず、当然ですけれども、先ほどから言ってますように、学力を十分つけてほしいと思っています。これも、どなたか忘れませうけれども、私は総合力が必要だと思っています。一部で得意な分野がある、これも一つのいい部分でありますけれども、やはり総合的な力、よく言われる知・徳・体のバランス、これまあ、高いレベルでのバランスというものを、私はつけていただきたいというぐあいにそう思っているところでもあります。

されど、知の中でも、知のバランスというもの、私はあるのではないかと考えています。勉強面でいえば、数学は得意だけれども英語は全くだめというのではなくて、いろんな、高等学校でいえばいろんな教科について、すべてについてやはりバランスよく頑張れる人間を育てる。そういうことが、結局、力になって、実績となって、自信となって、それで活躍できる人間に育つのではないかと考えておるところであります。

もう一つは、環境の変化に対応できる人間も育てたいと。中学校から高校に入ってくると、大きな環境の変化がありますけれども、なかなかうまく対応できない生徒も増えています。最近、この4月ですけれども、うちの学校でも、クラスがえあって、クラスが変わったことによって来られないという生徒もいたり、ちょっとした変化で、まさに、摩擦とは言いませんけれども、動きがとれない、考えることができないという生徒も増えている。

以前もどこかの会で話をしましたけれども、多分、前任校の話でありますけれども、就職して一生懸命頑張った。休むことなく一生懸命頑張って実績を上げた。だから、本

当に3年ぐらいで昇任をした。部下をつけてもらった。普通なら非常にすばらしいことなんですけれども、そのことで逆に動きがとれなくなって、行き詰まって会社をやめたという生徒がいたりします。やはり、そういう意味で、いろんな意味で総合力というのもあるのかなと思ったりしますけれども、そういうものが、やはり環境の変化に耐え得る力につながるということを考えたりしているところでもあります。

今の高校生、やはりこれから広島県の将来を担っていただければならないわけですので、これからの議論が非常にいいものになるように、私たちもいろんな意見を言いたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いをいたします。

坂越会長： ありがとうございます。

では、三好委員さん、お願いします。

三好委員： ベースになる仕事は、余暇生活開発士というフリーで仕事をしております。ちょうど10年前に、教育改革の一環で学校長に民間人を登用ということがなされたんですけれども、そのとき社会教育の場面で、生涯学習センターのほうへ生涯学習推進マネージャーとして登用されました。民間から初めて登用したということでした。4年間、生涯学習センターで勤めさせていただきまして、多分、今日は、その生涯学習の視点からの意見をということになってくるのだらうと思います。

生涯学習というのは、人間、一生涯、生きる力をずっと磨いていくわけなんですけれども、そんな中で、学校教育の場面というのは、実は長い生涯を思ったときには、ほんのわずかな基礎的な部分に位置づけられているわけですね。そこでつける力というのは、当然学校という組織でつける力なんだから学力ということになるんですけれども、ただ、この学力が、今までのところ、その評価が、そこにおいて学んだ力を数値的に評価するということになされていた面が多かったと思うんです。それで、実は、この学力というのは、そこでどれだけ学んだかという力だけではなく、もう一つ、今後どう学んでいける力がそこで身につけているかということも見てあげたいなというふうに思うんです。生涯学習の視点からいきますと、学校を卒業したらもう勉強しないという人にならないで、一生涯学び続けようという人でいてほしいわけです。だから、評価にもう一つの視点を加えたいなというふうに思っております。

「学ぶ」ということなんですけれども、一つの事例として、先ほどからずっと伝統的な文化の話が出ております。私ごとではありますが、実は、私は日本舞踊をやっておりまして、今年で60年になるんですけれども、この世界では、師匠が先生として一方的に教えていくという世界ではないんですね。先生とは呼びますが、その人は自分を常に磨き続けておられて、いつも精一杯の姿を見せてくださる。教わる側は、その先生を見ながら自分でつかみ取っていく、まさに自ら学ぶわけです。いろんなことをつかみ取っていくんですね。知識の場合は、やっぱり先生のほうから与えられたものを受け取るという面が多くありますけれども、この伝統文化の場合は、その師自体がずっと学び続けている姿を見て学び取るという、このパターンを、実は学校の中でも何とか取り込めないものかなというふうに考えております。そのときの第一歩としては、やっぱり教師の在り方ということではないかなと思うんですね。すべてとは申しませんが、自分自身を常に磨き続けて、その姿から子どもたちに何かをつかんでほしいという姿勢を持ち続けてらっしゃる先生方が、どの程度いらっしゃるのかなということをおっしゃるので、今回の高校教育の在り方の中では、教師の在り方というのも、表には出なくても、やっぱり大切な部分ではないかというふうに思っております。

坂越会長： はい、ありがとうございます。

牛来委員さん、お願いします。

牛来委員： ソアラサービスという会社を経営しております。

起業家、私自身起業家として12年のまだひよっ子なんですけれども、起業家の支援として、共同オフィスを営んでおります。地元の企業とコラボしては商品開発をしたり、あと育成ということ、若い20代、30代のクリエイティブ人材の育成や専門職の育成ということも行っています。

その中で、時々大学で講演もさせていただいて、若い学生たちとお会いする機会もあるんですけれども、今の高校生、若い人たちに対する環境についても、今まで、今、たくさんのお意見が出たので、ほとんど共通の思いであります。じゃ、育成という、教育という部分で一番高校生の皆さんに持ってもらいたいものというところを一言で申しますと、やはり夢を持つ力を持つてほしいと思っております。先ほど、夢だけは、もちろん具体的に行動がなければということはもちろんなんですけど、まず、例えば英語を身につ

けたりとか、何かの専門分野でも何か資格とかコミュニケーション力を高めたいと、そういう意欲というのは、やはり自分がやりたい、こうなりたいとかこうやりたいという思いが、まずあることが第一かと思います。具体的な例で言うと、先日20代の若者が私のところに来て、大学生なんです、学校にほとんど顔出してない。アパレルにでも行きたいから、東京に行こうと思うと言ったので、私は何で東京なのかと質問しました。アパレルの業界たくさんあるしということだったので、何でアパレルに行くんだったら、イタリアやフランスではないのかというふうに聞くと、はっとした顔をしてました。いや、お金がかかるからと言われたので、本当にお金がかかるの。東京と比較してどうなのかという問いかけをしました。もちろん、一方的にこうあるべきということを伝えても動かないし、本人が変わらなければ変わらないので、実際にフランスと日本を行き来している起業家の仲間を直接的に紹介して話を聞く機会を持たせたりとか、実際にアメリカにワーキングホリデーで何年もいて、その後何年もアメリカにいた起業家たちを直接合わせてみると、もう話を1日、彼らの話を2時間聞いたけど、もう意識が変わったんですね。あ、自分はやっぱりフランスに行く決めて、彼はどう変わったかということ、今、フランス語を、日本、自分でアルバイトしながら、お金をためながら、フランス語を自分のお金で学んでいます。

要は、あ、フランスに行きたいという、そんな夢がまず1つできたから、具体的に学ぶ意欲ということを描いたのではないかという。じゃ、それを、先ほど先生方もという話も出て、私もまさに同感で、もちろん家庭においては親が変わるべきというのは、親がそういうことも、夢を持たせるようなことを伝えるべきであるし、やっぱり先生方が、先生方御自身が生き生きとして働く、楽しく働く姿であるとか、夢を持っている姿ということを見せることが、実際生徒の皆さんにそれが直接的に伝わるので、先生が口ばかりで言われていても絶対伝わらないと思うんですね。ですから、まずはその意識改革も必要なのではないか——もちろんやってらっしゃる先生もたくさんいると思うんですが、もう少し力を入れるべきではないかというふうに思います。

あと、それはもう大きな話なんですけれども、もっともっと本当に現場レベルで入っていったときに、すごくありまして、もちろん語学力だったり専門力、いろんな身につけてほしい能力がいっぱいいっぱいたくさんある中で、今、採用という自分の会社の中の若者たち、どういう視点で採用するかという観点でいうと、最低限文章力を、最低限身につけてほしい。もちろんグローバル人材ということで、語学、英語とかフランス語、もちろん中国語、そこはいいんですが、そこに行く以前、その前の話として、まず日本語をちゃんと書けよという。それは別に文章をまとめる力だけではなくて、そこに意見や感想を入れ込むという、そこだと思っただけです。実は、ある女子短大生がうちへインターンに来たときに、彼女が書く業務報告が非常に、本当に意見が書かれているしすばらしかったんですね。その子は、コミュニケーション能力も高く、別にアルバイト経験もないのに、我々経営者や大人たちと普通にキャッチボールができるんです。何であなたはそんなに文章をちゃんと書いているのと聞いたら、実は、高校のときに弓道部だったんですが、その弓道部の先生が、毎日毎日感想文を書かせた。ちょこっと書くぐらいではなくて、そこにもう本当に自分の感想、今日の気づき、反省点、振り返り、今後どうありたいということを毎日書かされた。この積み重ねってすごいと思うんですね。そのあたりの文章力というところから派生するいろんなビジネスセンス、振り返りのところから何かを発見する能力ということにつながるでしょうし、いろんなことにつながるのではないかなと思います。

最後に、ちょっとすみません、1つだけ。

先ほど褒めて伸ばすということで1つあったんですが、もちろん褒めて伸ばすという方針は、非常に有益だと思います。ただ、逆に、厳しく、要は褒めることイコール甘やかすことではなくて、厳しさというところのバランスを、やっぱり現場の先生方がきちんと理解していただきたいなというふうに感じております。甘やかしてほしくない。うちに入ってくる若者たちは、本当に甘え切ってる子たちもいるので、そこは非常に感じております。すみません。

坂越会長： ありがとうございます。

それでは、すみません。遅くなってしまいました。毛利委員さん、お願いします。

毛利委員： 私は、広島県の高等学校PTA連合会という、県立、あるいは市立の高等学校、特別支援学校のPTAの連合会で副会長をしております。

私は、3人の娘がおりまして、広島市内の県立高校や市立高校で育てさせていただき

ました。子どもたちと触れ合う中で、今の高校生はすばらしいと感じています。高校生世代というのは、本当に力を持っていて、私たちのほうがエネルギーをもらっていると思っています。

それから、もう一つ、娘たちを見ていてもそうなのですが、やはり目標を持ったときに、非常に変わるというか、本当に勉強も頑張るし、あるいは何かになろうと思えば、サポートとか、アドバイスをもらいにいろいろな人に会いに行ったりということで、本当にコミュニケーションの力も育つんだなというようなこともあって、その変化というのが、非常に激しい世代かなと。ですから、非常に感じるのは、落ち込んだり勉強しなかったりという時期もあったりするんですが、それが突如変わっていくようなこともあって、そういう目標を持てるような、そういう高校生活を送ってほしいなと、非常に強く思っています。

もう一つ、先般からグローバルな人材ということが言われているんですけども、私が知っているNGOから、広島県内にも、例えば中国の方とか韓国の方とか、あるいはブラジルの方とか、そういう方が4万人近くも暮らしているらしいというように聞きました。企業さんでもさきほどお話があったように、さまざまな海外の方と一緒に仕事をされる機会とか、あるいは海外の方が入って仕事をされる機会が多い中で、海外で活躍する人材というのも、当然今の国際社会の変化の中で非常に大事なことだと思いますが、一方で、今、この広島県で暮らしている海外の方たちとともに学んでいくようなこともあれば、私たちが何をしなくちゃいけないのか、どういう形で社会に役に立っていけるのか、どういう仕事についていったらいいのかというようなことも、幅広い形で実感できて、そして国際的な、広島県自身が国際化社会というか、そういうものになっていく力を、未来の子どもたちと一緒につくっていくのではないかなというようなことを感じています。

私は、今の子どもたちを見ていて、「社会が求めていること」をしっかりと考えて、「できること」育てていく、実践力をちゃんと育てていく、そういう形で社会参加していくような、やりたいことだけを何か考えているだけではなくて、社会が求めていること、そして自分ができることを、しっかりと固めていってもらいたいなというようなことを感じます。

その上で、専門的な力もですけども、やはり、ちょっと硬い言葉になりますが、哲学とか倫理観とか、何かそういう、ちょっと深く本を読んだり、考えたり、そこで人と話をしたり、そこで大人の人たちとか、先輩とか仲間も話に乗ってくれるような、そういう機会を高校生活の中に、クラブ活動とかクラスの活動の中につくってほしい。特にこれから子どもたちが生きる社会は非常に厳しい社会だと思いますので、その中で生き抜いていくために、そういう深く考えてみる機会が与えていただけるような高校生活を送れるようにしていただければなというようなことを考えています。

坂越会長： ありがとうございます。

時間がいっぱいいっぱいになってしまいましたけれども、本当にさまざまな観点からの御意見でありました。

事務局のほうには、お願いですけども、今いただいたいろんな御意見、本当に多様な大事なことだったと思うので、少し整理していただいて、次回、冒頭にでも、こういう論点でというような、御報告をいただけたらと思いますので、どうぞよろしく願います。

事務局： はい、承知しました。

坂越会長： あともう一つ、これはもういきなりのお願いなんですけど、やっぱりこれだけの人数でこれだけの時間で話し合いをしようとするとなかなか難しい。ちょいちょい審議会なんかであるんですけど、何々ペーパーとかだれだれさん提案とか出たりするんですよね。もし委員の皆さん、言い足りなかったとか、いや、私はこういうことに関してはこういうデータ持ってるよみたいなことがあったら提供いただいて、多くの皆さん方、メールで受け取りができるでしょうし、そうでない場合も、何かの形で共有できるような、そんなお願いしてもいいでしょうかね。

事務局： 承知いたしました。

坂越会長： はい、どうぞよろしく願います。

もう、なかなか私のほうでもまとめて、今、これでまとめようとする、すごい形式的なことになってしまいますので、あえてしませんが、1つ、委員の皆さん方念頭に置いておいていただきたいのが、やっぱり私たちのこの新協議会というのが、まず

一つ、ひろしま未来チャレンジビジョンの、ある意味それを踏まえながらということでもあります。広島県内の高校で学んでよかったと生徒たちが思えるような、そういう高校づくり、それからグローバル化人材、先ほど出ましたけれども、郷土とグローバルをつなぐような、そういう方法、方途をどうやってつくっていくか、そんなことについてぜひ御意見をいただきたいというふうに思います。どうぞよろしく願いいたします。

以上をもちまして、広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会第1回目を終了したいと思います。

赤岡委員： すみません。資料の追加だけ。

坂越会長： はい、どうぞ。

赤岡委員： さすがに学校関係の資料は、データは、23年、平成23年の資料が入っておりますものすごくいいんですね。経済関係の資料は手に入らないのかもしれないけれども、かなり古いのがございまして、もし更新できるのがあれば更新していただくと助かります。

坂越会長： わかりました。それはできるだけお願いしておきたいと思います。

ということで、これからの協議会については、先ほどありましたけれども、また次回、引き続き、どうぞよろしく願います。

それでは、進行のほうを事務局にお返しします。

事務局： はい、どうもありがとうございました。

次回、第2回の協議会でございますけれども、5月31日木曜日の午後2時からとさせていただきますと思っております。

協議内容の方は、高等学校教育の目指す姿を予定しております。どうぞよろしく願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

(12 : 00)